

2026 年 6 月 14 日 田中旅館にてインタビュー

昨年 2025 年 7 月 6 日にインタビューさせていただいた内容を確認しながら、それ以降の状況や意識の変化について、お聞かせ願えればと思います。

まず、2024 年 1 月 1 日の状況についてですが、

『例年の元旦は、親戚が 20 人くらいこの旅館に集まる。輪島市内にも子供がいるので、ここは良い別荘にもなっていた。震災当時、通信は 10 日間は繋がらなかった。津波が怖かったので、裏山の中腹まで逃げ、ポケットパークの隣の畑に 20～30 人(この内田さんの親戚が 8 人)で固まっていた。その後、夜になるので、その下の公民館へ移動し、そこで 2 晩泊まった。その後は、この旅館(家)に戻って、ずっと夜はここに泊まっていた。ほぼ 10 日間位居た。

その後、救助のヘリコプターが来て、輪島市街に連れて行かれ、そのまま輪島からバスで 6 時間揺られて加賀温泉の「百万石」へ避難した。1 月 10 日ごろのことである。そこで 3 ヶ月ほど宿泊させてもらった。その後、加賀温泉から、少しでも息子の職場の近くにということで、羽咋の方へ移動した。さらに、羽咋から輪島の仮設住宅に移動した。2024 年 5 月頃のことだった。

その間、大沢地区の村の区長からは何の連絡もなかった。この間、地元の状況も村の人々の様子もわからなかったので、本当に連絡が欲しかった時だった。自治体では、2007 年の地震後の道路整備をしてくれなかった。』

というお話を昨年お聞きいたしました。

ここで、「自治体では 2007 年の地震後の道路整備をしてくれなかった」というお話がされていたのですが、それは具体的にはどこの道路のことを指しているのですか？

「それは輪島から海岸線を通って、大沢地区まで来ていた道路のことですが、輪島市中心部から来ると 20 分くらいでここまで来れた。その道路は 2007 年の地震後、整備してくれなかった。そのため、2007 年以降は、大きく迂回しながら現在の山道と谷筋を通ってこなければいけないため、車で 40 分はかかる。海岸線沿いの道路（石川県道 38 号 輪島浦上線のこと。別ファイル参照）をきちんと整備してくれれば、輪島から 20 分やから、まだまだここに住む人もたくさん出てくるけれど、現在のように輪島から国道 249 号を浦上まで下って結構迂回して、こうぐるっと回ってくると、道も悪く時間もかかる。18～9 年前の能登の地震の時に、海岸の道路の方は不通になった。それからごく一部区間は通れるようになったけれども、本格的には確か（整備を）やってないんですよ。いや、海岸線の道は通れるようになったこと 1 回もないね。」

なるほど、そうすると 2007 年の地震の時からもうずっと海岸線のルートの道路（県道）っていまのような（浦上から上大沢を抜けて海岸線を北上して大沢までの道路のみ通

過可能な状態) 感じだった? 大沢以北は、県道の整備も全然進まないということなんですね。ありがとうございます。これで未整備のままの状況、はっきりしました。

注) 石川県道 38 号 輪島浦上線 (主要地方道 輪島浦上線): 山間部を越えて輪島市街地と門前地区を結ぶ国道 249 号に対し、外浦海岸を通るコースとなっている。大沢地区では沿道の家々にたてられた間垣 (重要文化的景観) を見ることができる。(1977 年 (昭和 52 年) 開通)

次に能登豪雨以降の状況についてです。

『2024 年 9 月 21 日は、祭りの日で集落のすべての家が参加する総行事にあたっていた。しかし、当日は豪雨の危険の予報が出ていたので、出席しないことにした。豪雨の前に、河川や家裏のせせらぎが流木で詰まっていて、この近くの家々の水源にしていた取水桧を生かしておくために、その除去をするのが大変だった。(まだ流木が詰まった状態ではあるが……)』

ようやく、2025 年の 5 月の連休あたりから、日本財団経由のボランティアが 7 人位大沢地区にまで来てくれて、この地区の家の泥出しや裏のせせらぎの取水桧への流木の除去など手伝ってくれて本当にありがたかった。』

このようなお話を昨年お聞きしました。

日本財団経由のボランティアの人々は、5 月の連休のとき 1 週間位は居てくれて、まずは飲料水や水を確保するルートを整備してくれたのですね。なお、水がようやく通ったのは、昨年面接した 1 週間前(2025 年 6 月末)のことだったとお聞きしております。その取水桧の様子は、その面談のあと見させていただきました。

そのあとも、いろいろなボランティアが入ってきてくれたということでしたが、その後の様子はいかがでしたか?

「現状では、飲料水としては桧からの水は使えない。生活用水としては使えるが、やはり衛生面のことを考えると、かなり山の状態が荒れているので躊躇する。自家用の貯水桧から流している自宅の配水システムに、簡易水道を接続して合流させるのは保健所の許可が下りず、結局断念した。1 年に 2 回は保健所の方で水質の検査をするんだよね。昔はそんなことはしていなかったんで、あまり気にしないでいたけど、飲料水ということだと厳しくなっている。なので、今は、飲み水は、ペットボトルでもってきている。」

ありがとうございます。そうですか。飲み水は、そうすると輪島を車で出るときに、毎日ペットボトルを持ってくるしかないっていう状態なのですね。

「昔ならね、その水飲んどってんけど——別に飲んどっても大丈夫なんやけど——、やっぱり今の時代やから、あの谷に動物が入ってた、菌が入っているということで、あそこの取水桧の水は飲まんようにしています。」

そうすると飲料水っていう意味ではすごく大変ですよ。

「そうやね。飲料水はもう毎日持ってきています。私ら、雨降る日は来ずに、天気の良い時だけにしています。雨が降っているときに来ると、あの山を見るとぞっとして危ないもん。」

そうなんですね。飲料水については、それは不便ですね。

一応、またちょっと戻りますけれど、去年の面談で、これまでの能登らしい生活と大沢地区の今後の展望について、次のようにお聞きしました。

『田中旅館さん自身は、現在1週間の内8割方、大沢地区に来ているとのこと。但し、地震の後はこちらで泊まったけれど、豪雨の後はこちらに泊まっておらず、毎日輪島市街の仮設住宅から通ってきている。将来も、正月には親戚一同がここに集まって過ごせるようにしたいと思っている。』

「今年も正月に集まろうと思っていたのだけれど、あの豪雨で通行止めになってしまって、ここでは集まれずに、能登町のイカキングのところで親戚が集まって正月を一緒に祝った。この部屋に、これまで親戚が集まって撮った集合写真があるけれど、集まれるのは本当に嬉しいね。」

昨年聞いた話を続けます。

『この区長さんは、金沢へ行ってしまうと連絡がつかない。大沢集落の属する西保地区は、7つの集落からなるが(小池おいけ、下山、赤崎、大沢、上大沢、西二又、上山の7集落)、「死ぬまで仮設住宅に居る」という住民の声が多い。ほとんどの世帯が年寄りの夫婦かひとり世帯である。現在の仮設住宅は地区ごとの居住が出来ているので、近隣関係は保っている。災害公営住宅には、とても入れない。家賃がかかるし、それ以外の光熱費や生活費もかかるので、基礎年金しかない年金収入ではとてもやっていけない。』

その区長さんとは、今でも連絡がつかないのですか？という質問に対し、「私らは、区長をやっているのであれば、私らと一緒に仮設住宅の一室を借りて住むのが本当じゃないかなと思ってたんですけどね。本当にずっと全然連絡がつかない状態でしたね。最近、こっちに戻ってきて、住んでるらしいですね。一番あっちのうちはわ。ちょっと変わってる人です。」

どうやら、実質的には大沢地区の区長というポジションは、住民の意識のなかでは全く機能していないという感覚だが、本人はどうやらやめたがらないということのようで、最近はまだここに帰って住んでいるようだ。実は、この地区には、むかしから山の共有林があって、その管理の権限がある。その権利関係とその管理組合の運営については、収支報告書もずっと出されないままになっている。区長はもう12～13年続けていることのようなので、もうそろそろやめたらどうかと住民は思っているようだが、本人はやめる気はないようなので、その点は曖昧なまま継続している状態になっている。そこに、近年、この山のあたりに風力発電の設備を設置するという話も出てきていて、そのあたりのことはだれも説明してくれていないのが現状のようである。

それから、現在の住居や今後の居住意向については、みなさんどんな感じでしょうか。
「仮設住宅については、だいたい仮設によって違いがあるけれど、やはり本当に狭い。ケースによるんだけど、仮設でも離れて住むのはいやだったので、子供夫婦2人と孫4人で1戸分しか仮設住宅に入れなかった。そうすると、やはりいつか孫の学齢期の状況に合わせてこの地を離れたり、ということは起こってくる。そうするとますます高齢者の単身世帯や夫婦世帯のみが残るようになってくる。また、子供たち世代の他出が進むと、ある時期になると、高齢者の身体状況にしたがって、奥能登にも居られなくなってくる。

災害公営住宅に住むという意識については、経済的にみると、とてもじゃないけど入れないっていう感じかな。このような田舎の年寄りには、国民年金が5万円程度、災害公営住宅に入ると25,000円取られる。それに、諸経費を入れると生活ができない。だけど、家も流され、その敷地が危ないところであれば、ほかに選択肢がないので、申し込んだっていう何人もかいますね。

また、どうしようもないときには、少し財産を残して、子供にでも頼むかなと言って、子供のところへ行くけど、今の時代はね、私今じっと見ると、そんな子供のところへ行くとか、そういうことは通用しない時代になってる。私の同級生にも、富山の子供のところへ行っただけど、しばらくは大事にしてくれるけど、なかなか長期に住むとなるとお互い気を使って難しくなる。そういう形で引き取られるっていうか、一緒に子供と住むケースもあるけれども、ほとんどは感覚としてはもう無理だと思っている。子供が生活費の一部をサポートすることはあり得ても、一緒に住むっていう選択肢はほとんどもうないっていう感じじゃないかな。」

これも昨年の面談のときに、聞いた話ですけど、

『かつてのここでの暮らしは、半農半漁の生活で、漁業は定置網をやっており、年間で1〜2億円の漁場になっていた。また、20町歩の田んぼと畑もあり、米も野菜も自給出来ていて生活に困ることはなかった。

水道も自家水源がある。燃料は、木材の間伐材があるし、近くで炭焼きをやっていたので、物々交換で炭を入手できた。田畑で自給と旅館用のものは大概取れる。魚介類は、魚がこの浜で直接手に入る。旅館での現金収入で、漁場にも現金収入が入り漁業者もやっていた。これが能登での生活だとずっと思ってきた。

自分には、子供たち4人のうち、2人は輪島市内に、2人は都会へ出ているが、正月には皆んな、ここに集まってきてくれていた。今後も、そんな機会は是非ともつくれるようにしたいと思っている。

最近、この集落で電気を申請したのが20軒で、それ以外はここに戻ることを諦めた。この間は、1軒1軒いなくなっていくという感覚だった。』

この旅館の当時は、どんな状態だったんですか。どのくらいお客が入ってきて経営されていたのですか。

「まあほとんどお客が続いたね。まず釣りブームでかなりの釣り客が来てくれたし、それからやっぱり観光で、すごくお客さんが来てくれましたね。ここは風光明媚やし、食べ物が美味しいから、土日なんかはほとんど埋まるって感じだったね。平日は、やっぱりちょっとバラバラバラ。釣り客とかそういう方は来られるけど。土日は、釣り客も一杯来てくれて、案外リピーターのお客さんが来てくださったのでね。同じ団体で二十年も続けてきてくれた人もいてね。ここは集落の雰囲気がちょうどいいです。それなりの静けさもあって、そして地域の範囲も決まってるもので、例えば学生が20～23時まで騒いでいても、ここらでどうにかなる。昔は民宿もあったけど、ほとんどここでは旅館に泊まる感じかな。やっぱりね、民宿では慣れないと結構もたもたして大変だからね。民宿をやるよりも、父ちゃんが出稼ぎに行って稼ぎを持ってきてくれた方が収入的にはずっとよいのではないかな。このあたりでは、出稼ぎはもうだいたいやっていたね。出稼ぎが始まったのは、東京オリンピックころからだね。東京オリンピックの時に高速道路を作ったり……。その出稼ぎが一家に一人男性が行くぐらいの感じでしたね。また女性も出稼ぎに行っていました、その場合はみかんの収穫などで和歌山とか行っていましたね。漁業者も冬場は海がしけて漁に出られるのが月に1時間なんていう時もあるので、出稼ぎに行くようになって、出稼ぎで収入を得るようになってきた。

昔は、そういう意味では物物交換で炭を入手できたから、燃料費はほとんどかからないで済んだんです。みんな昔は、いろりでやってたので、かかってもまあ多分電気代ぐらいしか出していない。だけど、今はもう全部そういうものも含めてお金がかかる。」

あと、この集落の状況なんですけども、去年聞いた話では、この集落で電気を申請したのは20件で。それ以外はここに来ることを諦めたという風に言われたんですけども、その後のこの集落の状況って、どう変わりましたか。

「その20軒っていうのは、ある程度関わってる。独身男性がいますもので、そしたら独身男性はやっぱり電気なしで住むわけにいかんから、単身の場合でも皆さん居住しています。近所にいた男の子ばかり3人で私らのいる仮設に入居していたのですけれど、昨日その人3人の男の子のうち、1人だけ仮設に残り、あとは2人は大沢に戻ってきた。「大沢はいいか」って聞いたら、「うん大沢いいわ」って男の子は言っていましたね。やっぱり昔から住んだところがいいでしょうね。

仮設住宅では3人部屋のところに（私らよりも広いところに）いたんだろうけど、やっぱり大沢いわって言っていましたね。船を持っているわけではないので漁はできないけど、まあ適当に適当に暮らしてるっていう、能登らしい生き方ならできているのではないかな。その他の方はといえば、電気はそのまま引いてるけど、仮設住宅に居住している。まだこっちに完全に来ておらず、仮設住宅にも居りこっちも電気を引いて使っている。大体20軒の方々はそんな感じですかね。来る頻度は、わたしらよりは（田中さんよりは）少し少ない。

結局ここで海に行かれん時とかは仮設住宅にいる。雨が降ったりするとね、ここには食料はないからね。ここには、また食料調達して来る。そんな感じの生活だね。田中さんたちも、おにぎり握って来てペットボトルも持ってきて、ここに来る。」

能登での旅館経営について

「旅館経営は、公務員のような仕事とは全然違うよっていう話をしています。自分でやってきたのは、人を騙すっていったらおかしいんだけど、自分の利益になるようにいろいろ考えて仕掛けていくってことなんだよね。旅館経営は、やはり商売っていう部分もあるわけですから、いろいろ工夫するんですよ。例えば、魚を出すにしても、このまま切って出しても付加価値がつかない。そこに、近くにある貝殻やその他のものを飾り物に使ったり、また他に海草などの食べられるものを付けて一緒に盛り付けると、食べる人もこれは珍しいもんやな、やっぱりここに来なければ食べられんもんやなと思ってくれる。100 円のものが 500 円ほどの価値のあるものになる。そうした工夫をずっとわたしらはやってきた。」

「それをちゃんと季節ごとにアレンジして、お客さんに食べてもらおうと、お客さんがまた来てくれるね。珍しいやっぱり、ここでこそ食べられると思ってくれる。お父さんのタイの姿作りをみんな美味しい美味しいと言って食べてくれて、何匹か食べたあと、私はその残った骨を、これちょっと預かっていくねって言って貰ってきて、あそこでちょっと焼いて、そしてこうお燗に酒を詰めて電気消して、マッチをつけると真っ暗の中で火飛ばすから、すごい演出になる。あの香ばしさですから美味しいですよ。みんな本当に喜んでくれました。栃木県や群馬県から来た人たちは、本当に喜んでくれて。すごい体験ですよ。こんなのはただですもんね。それでみんな本当に喜んでくれる。」

「そうした人の楽しませ方とか、そういう付加価値の付け方みたいなものの能力がいるわね。商売には付加価値をつけて。なるほどな、やっぱりこれを食べる時は揚げないとダメやなって学んで。そしたらリピーターもついてくる。20 年も続けてきてくれる人も出ていました。そこに商売のコツある。そういうことだね。だから、さっきの能登らしい暮らしっていうか、能登らしい商売のやり方っていうのは、あの考えてみるとね、お金はほとんど出してないわけよね。で、魚は確かに浜で金で買い付けるけど、その倍ぐらいの価値にして、食として出すわけですよ。あの自家製のものを、こううまく見せて盛り付けてね。それで喜んでもらってリピーターになってくれれば、もう恒常的にその人たちはお金払ってくれる。現金はそうして入ってくるから、もう自動的に商売が続いていく。そういうことや。そしたらリピーターも増えてくるし。」

「お父さんの方で、こんな形をした貝を石鍋として敷いて、魚のかたちを工夫して盛り付け、そして私が海へちょっと行って採ってきた海藻とか海苔とかをちょっと盛り付け、それをこう生のままに出してくるわけ。海藻とか海苔は採ってくる方々がいるの。それをあの人たちは汁鍋に入れて食べる。生のを食べるとは違うちょっと別の味がしてね。とても

うまい。あの量はこう結構あってもね。それほどお金はかかんない。」

こうして料理談義、おもてなし談義は続いていく。ここに、能登での（本人は俺たちの）おもてなしの仕方やなりわいのありかたが垣間見られた。